ふるさと 霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第121号（２０１６年６月）

風に吹かれて（99）

白井啓治

・みわたせば思ひ思ひにふる里の風

今月号からこの会報「ふるさと風」も十一年目に入った。この先どこまで継続できるかは不問にして、それぞれにふるさとの風としての物語を思い思いに吹かせて行ければいいだろうと思っている。時々、立ち止まって振り返ったとき、そこに来し方の年月という点が線となって見えればいいだろうと、贅沢な思いにいる。

１００号記念として出した別冊「ふるさと風」にこんなことを書いた。

『町が活性化するためには人が盛らなければ、栄えない。人が盛るためには、そこにたくさんの恋が生れなければ盛ることはない。▼もう六十年近くも前になるだろうか。「♪僕の恋人東京に行ッチチ…」なんて歌が流行った。そしてみんな都会の恋に憧れた。揚句、東京は一大田舎町になった。そこで田舎者同士が恋をして人がどんどん盛っていった。そして東京が手の付けられない程栄え、また腐ってもいった。▼惚れた女に、惚れた男に、この町出て行かないでと哀願されたら、六割がたの者がその町に留まるだろう。そうすれば人も盛りだす。人が盛れば、暮らしを創るための生産も創造されるようになる』…と。

この思いは今も変わってはいない。

しかし、この町を眺めた時、人が行き交い、人が出会う通りや盛る場が果たして何処にあるのだろうかと思ってしまう。昔からの人は、旧市街地を町内と呼んでいるが、そこにはもう町の面影はない。新興地にも大型スーパーや量販店は出来るが、町を成しているわけではない。

人の盛る場とは、商店街に限るものではない。歴史的面影の残る中に若き創造者たちが活々と表現活動を行う文化街であっても良いわけだ。発想を変えて新しい文化村構想などがあっても良いと思うのだが、時代遅れともいえる商店街志向しかないようだ。

また何時であったろうか、この町の将来を思いながら、羽仁五郎の文を紹介したことがあった。

『自分の国だから我々は日本を批判するのだ。批判するのはよりよい日本をつくるためなのだ。批判の無いところに未来はない。無批判に日本の良さなどというのはナルシズムだ。鏡の中の自分の顔をながめていい気分になっているような馬鹿と同じだ』

この会報〝ふるさと風〟もかくありたいと思っている。

直接的に批判するも間接的に批判するも、さらには何かに借りてあるべき姿だとか理想に思う未来の姿だとかを表現できる自由の場を、小さなものであっても継続して確保することが何よりも重要であろうと思う。

その思いが10年間、この会報「ふるさと風」を続けられた力になったのだろうと思う。

さてさて、10年に一月を踏み出した今は、次の記念を無事に迎えられることを思うばかりである。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、今６月号から１１年目に入りました。当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井　啓治　0299-24-2063　打田　昇三 0299-22-4400

兼平智恵子　0299-26-7178　伊東　弓子 0299-26-1659

３種類のチンパンジー

菅原茂美

真っ先にお詫びと訂正。先月号「風の呟き・地球の日」16ページ中壇1行目、「哺乳類と鳥類」は「脊椎動物」と訂正します。生存時代の単純ミス。

弁解になりますが抗がん剤闘病中。心神耗弱・疲労困憊。ならば「書くな！」と言われるかもしれませんが、老境に至り、私は書く事により、生きる希望を繋いでいます。今後、気を付けます。

＊

『人類はすべての生物の頂点にある』…今日まで、そう学び、そう信じてきた。しかし、最近の分子生物学の進歩により、必ずしもそうとは言い切れない…とする学説が登場してきた。

進化系統樹において、霊長目の大型類人猿こそ、高度に進化した「本流」と見なされており、そのなかでも特に人類は、頂点に位置する「超本流」と信じてきた。

しかし、大型類人猿は、まずオランウータンが、（誤差範囲の最大値をとる）１９００万年前に枝分かれ。そしてゴリラが９００万年前に共通祖先から枝分かれした。その後、人類が７００万年前、直立二足歩行により枝分かれし、体格や頭脳が発達。以来文明を築き上げ、宇宙までをも認識できる知性を獲得した。一方残ったチンパンジーは、７００万年前とあまり変化はしていないようにみえる。人類は全生物の頂点と考えて当然である。【しかし、大変化がなくとも、種を維持できるのならば、かえってそれが「真の進化」と言えなくもない。大型化した幾多の動物が滅亡していったのを見れば、何百万年も殆ど変わらず、生き残っている姿こそ、真の進化なのかもしれない。】

さて人類と決別した後、本来のチンパンジー（ナミ・チンパンジー）は、ボノボ（ピグミー・チンパンジー）と枝分かれ（２５０万年前）している。この二者は、今後どちらが本流でどちらが支流となるかは、これから何百万年か経たないと分からない。ボノボに比べ、圧倒的に数の多いナミ・チンパンジーが主流のように見えるが、それは分からない。そういうわけで、この二者に、人類を含めた３種を「チンパンジー亜族」として、統括した見方をすべきだと、ある科学者は主張している。

私はどんなに進化を遂げようが、戦争ばかりしている人類を、万物の霊長などと奢るのは、単なる「ウヌボレ」に過ぎないと、これまで何度もこの会報で述べてきた。神様の課長補佐ぐらいのつもりで、己を高度の位置に置きたいのなら、まず人口コントロールをしっかり遂げなければならない。諸悪の根源は、人口過剰にあると考えるからである。人類の過去の歴史を見れば、国盗り合戦・侵略・植民、更に敗者を奴隷化・あるいは虐殺。そして現代は、進学競争・権力闘争・経済戦争と、自分さえ良ければそれでよいとする全世界の全人類に共通する醜い潮流。こんな事はすべて克服しないと、神様の課長補佐には昇格できない。

狼はエサが少なければペアリングを作らない（セックスをしない）自律性を持っている。大方の動物は、一定のポピュレーション（人口）を維持するため、自律性を持っている。バッタは小さい島で数が増え過ぎ、草を食べ尽くすと、一斉に海に飛び込み集団自殺するという。数が増え過ぎ、地球から零れそうな人類を見ると、バッタ並みの進化しかできなかったのかと、しみじみ思う。

人類が短時間に築いた文明など、はしゃぎ過ぎと見える。『現在の地球は、未来の子孫からの預かりもの』という謙虚な態度を持ち、偽文明発展のため、環境破壊・資源枯渇など阻止しなければ、人類の未来に、光明はさして来ないと強く思う。

地震・津波・火山噴火など、それに耐えうる人口密度のコントロールが絶対必要と考える。もし人類に真の知恵があるならば、７００万年の経過をディープラーニングし、これら自然災害に耐えうる小規模集団を完成し、人口増加を自律コントロールできるシステムを開発して、ささやかな「種の維持」ができてこそ「真の進化」といえよう。

＊

ではその３種のチンパンジーとは何者か？

まず「人類」であるが、人間の生物学上の標準和名は、カタカナで「ヒト」と書く。「人」は文化的社会的な呼び方である。ヒトの学名は Homo sapiens(ラテン語で「知恵ある人」の意味)。ヒトは、分類学上、動物界ー脊椎動物門ー哺乳綱ー霊長目(サル目)ーヒト科ーヒト族ーヒト属となる。

古来「人は万物の霊長であり、全ての生物から区別される」と言われているが、生物学的には、全くそのような判断はされていない。ヒトと類人猿は何をもって区別するか？　形態は比較的簡単に区別できるがＤＮＡの塩基配列は極めて似ており、チンパンジーとヒトは９８・６％同じ。結局の所、「直立二足歩行」という特異の現象を以って、他の類人猿と線引きが行われている。

今から７００万年前、人類の祖先はアフリカ中東部で、樹上生活から地上に降り、最初、前足は、こぶしを握った背側を地につけて歩くナックルウオークの四足歩行。そのうち、片方の前足には餌

や子供などを抱え、３足歩行をし、のち、明確に立ち上がって２足歩行をし、人類の誕生となる。

アフリカ東部は、南北に走る大地溝帯により、縦裂し、西側は降雨量も多く森林に富むが、東側は雨が少なく乾燥気味で、樹木は少なくサヴァンナ化している。人類の祖先はその森林からサヴァンナへと移行するあたりで誕生したようである。従って直立二足歩行を始めても、しばらくは足の親指は、木の枝などを掴むために、手と同様、他の４本の指と対向していた。化石が証明。

そもそも人類の祖先は、環境の変化により、森林では食糧確保がままならず、やむなく地面に降り、直立二足歩行を始めた事が、自由な「手」を生み、道具を作り、身振り手振りのボディランゲージから言語を生み、大脳を進化させた…と考えられる。地面に降りた「裸のサル」は、肉食獣にとって、絶好の餌食。脚は短く早くもない。自ずと立ち上がり、より遠くを見つめ、天敵を素早く発見し、急いで逃げる。こうして、７００万年かけて、背丈は１㍍伸び、大脳は３倍に膨らんだ。

大方の動物は体内でヴィタミンＣを生合成できるが、人類の祖先は樹上生活当時、イチジクなどが主食のため、自然とＶ・Ｃは十分に取れたので体内で生合成しなくなった。そのため、新鮮な野菜や果物など不足すると壊血病（貧血・出血）などになる。（幕末、ペリー提督が浦賀にきて開国を迫ったのは、日本近海で米国の捕鯨船団〈500艘〉に、新鮮な野菜と水と薪が、ただほしかっただけの話。太平洋でクジラ減少の遠因は、正にここに有り。今時、シーシェパードの暴挙は筋違い）。

なお「裸のサル」の件だが、人類は体毛を失った事が大進化の原動力となった。その理由は、木から降りて平原を駆け回るようになると、体毛は体温上昇をきたすので、それを防ぐため体毛を失う事になった。すると皮下結合織にエクリン腺が発達し、水分を蒸発し、気化熱を失って体温を下げる。一般の動物は体毛があるため、瞬発力で短距離なら早く走れるが、長距離は息が切れて走れない。そこがヒトの狙い目で、どこまでも獲物を追いかければ、必ず動物は先にダウンする。こうして人類は大量の獣肉を手にする事ができ、それが大脳発達に大きく貢献したと言われる。なお、陰毛・腋毛にはアポクリン腺（特異臭分泌）が発達し、匂い付けの情報交換手段として脱毛せず、現在も残っている。秦の始皇帝は特定の女性の特定の体臭を好み、寵愛したといわれる。

しかし、直立二足歩行は良い事だけではなかった。重い頭骨を７個の頸椎が真下で請ける。そのため頚椎症や肩こりなどの原因となった。更には同じ事が上半身の重みを一気に腰椎が請け負って、腰痛に悩む事に…とよく言われる。また、直立したために、胃下垂や痔や鼠径ヘルニアなどの厄介な病を請け負ってしまった。しかしアフリカで、今でも狩猟採集生活をする狩人にＧＰＳ装置をつけて調査した結果、一日28㎞も走り続ける人々や、カナダで陸上長距離選手24人のＭＲＩ検査の結果、椎間板などに何の変化もなく腰痛など全くないという。その事から、腰痛は直立二足歩行が生み出した弊害とだけは言えず、むしろ、近代文明が生み出した、前かがみの長時間労働による変形姿勢がもたらしと病と解釈されている。

ヒトは１個の受精卵が細胞分裂を46回繰り返して60兆個の細胞からなる。理論上は細胞の分裂回数の能力からヒトの寿命は120歳といわれるが、色々のリスクがあり、ほぼその３分の２くらい。

【動物は人に飼われると栄養・病気・事故などが減り、野生よりも長生きできる。人類も言わば人に飼われる「家畜」とも考えられ、先進国では、長寿を獲得したと言われる。】

しかし、ヒトは２３０００個ほどの自分の遺伝子のみでは生存できず、人体に共生する約600兆個の細菌などの活動のおかげで生きる事ができる。ヒトの遺伝子はわずか７００万年という短期間では、あまり変化できず、他の類人猿との決定的相違点はほんのわずかしかない。

＊

さて、次にチンパンジーとは何者か。

チンパンジーの生息地はアフリカのセネガル、コンゴ、ウガンダ、ルワンダ、タンザニアなど。体形は、雄で85㎝、65㎏。雌で77㎝、47㎏。脳容積平均３９７㎖、平均寿命50年。飼育下で57年の記録があり54歳で子を産んだ記録もある。生殖は11歳で思春期。14～15歳で初産。多夫多妻の乱婚型(昔の人類も同じ)。食べ物は果物、昆虫（シロアリを木の枝などで釣り上げ捕食する）、若芽など。しかし他のサルやイノシシ・ハイラックスなども捕食する雑食性。夜、樹上に巣を作り寝るが、豹などにより捕食される。チンパンジーは子供が成長すると、息子ではなく、娘が群れを出てゆき、近親交配を避ける。

チンパンジーで特筆すべきは、一般的に「子殺し」が行われ、それを大人が仲間同士で食べる。特に雄の子が狙われ、成熟すると雄対雌比は１対２となる。レイプや虐殺はしばしば行われ、人類とチンパンジーは誠に残虐性を帯びた動物である（ボノボにはそれがない）。ミツバチも天敵に巣を

襲われると、働き蜂は急いで自分達の幼虫を食べるという。敵に利を与えるより自分で食べた方が無駄にならないという原理らしい。生き物の世界は、綺麗ごとだけではなさそうだ。

さて、哺乳類の誕生は２・２億年前であるが、霊長目の誕生は、恐竜が滅びた６５００万年前。恐竜亡き後、霊長目は格段の進化を遂げ、大型類人猿へと発展するが、まずアジアでオランウータンと枝分かれし、次はアフリカで、ゴリラと袂を分かった。

【＊ヒトの誕生が直立二足歩行を始めた700万年前としたのは一つの仮説。ヒトのオスの犬歯が短くなり、足の親指が他の４指と対向せず、５本並んだ完全直立歩行は、360万年前のアウストラロピテックス・アファレンシスからが、ヒトの誕生とする説が最近有力。更にミトコンドリアの分子生物学的解析から、487万年前に、ヒトはチンパンジーと別れたという学説もある。】

こうして大型類人猿の共通祖先は、次々枝分かれし、チンパンジー・ボノボ・ヒトの３種のチンパンジーは一つに過ぎない…とする新説がある。

しかし欧米はキリスト教が根深い国々なので、未だに人類がサルから進化したなど認めない民族的集団もある。アメリカの州によっては、進化論を教えた教師は襲撃されたりしている。どの宗教も「原理主義」というものは、すさまじいもの。また法律で進化論の授業を禁じている州もある。その点日本のように多神教の国では、進化論は、すんなりと導入されたといえる。

＊

さて３種のチンパンジーの最後は「ボノボ」(かつてピグミー・チンパンジーと呼ばれた)の登場である。１９２８年アフリカ・コンゴー中西部で発見。限局的に生息する固有種である。数も少なく国際保護種であるが密猟（展示用）も後を絶たない。体長は雄73～83cm、39kg。雌70～76cm、31kg。チンパンジーよりやや小型。生息地は熱帯雨林。樹上生活の昼行性。しかし、時により地上にも降り、ナックルウオークで４足歩行をするが、直立２足歩行も上手に行う事もある。15～120頭で群れを作り、父系社会であり、子供の雄は群れに留まり、思春期になると娘が群れを出ていく。

特異現象として観察される事は、なわばりの辺縁部で他の群れと衝突しそうになると、なんと互いの雌が相手雄に近寄り、慰めあって闘争を未然に防ぐ知能があるという。人間もこれくらいのサル知恵を働かせれば戦争にならずに済むものを…。食性は雑食。植物の葉・芽、昆虫、小型の爬虫類や哺乳類。非常に温厚で知性ゆたか。哺乳期間は４年。11歳で思春期。14歳で初産。寿命は40歳。

交尾の正常位は人間だけと思われていたが、動物で唯一、ボノボも正常位で行う。ヒトのように排卵期に発情表現をせず、いつでも雄を受け入れ、更に妊娠中でも雄を受け入れる事は、ボノボにはない。発情期には、お尻の性皮が膨張し、ピンクに染まる。勿論発情期以外は交尾をしない。

＊

私がなぜこんな事を、こまごま述べるかというと、ヒトとほぼ同じ寿命の他のチンパンジー族の「がん」発生率は、２％以下なのに対し、人類のがん発生率は30％だからである。日本で毎年、26万人ものがん患者が生まれている。人類の雄は野生時代、獲物を多く持ち帰った雄は、より多くの交尾機会を得、雌は能力のある雄を他の雌にとられないよう、いつでも交尾の要求に応じるように進化し、より多くの子孫を残すようになった。

元々人体は細胞数が増え、一定数を超えると、アポトーシス（自殺命令で自爆）機能が働き、恒常性を保つようにできている。それが生殖のための精子細胞が増える際は、この規制は適用されない。ところが、がん細胞は造精の際の自殺免除機能を、ちゃっかり横取りする形となった。アポトーシス無視のがん細胞が定着。人類にがんが多い原因は、一つには、セックスの回数が多くなるように進化した事が遠因といわれる。

ヒトと他のサル族との根本的相違点は、このアポトーシス機能を無視する遺伝子が有るか無いかで決まる。人類の造精能力の過剰は、食糧のあるなしに拘わらず、あまりにも子供を作り過ぎる。

地球の人口収容能力は凡そ50億人を限度とするといわれているが、現在73億人であり、限界を遥かに超えており、今や深刻な問題となっている。地球温暖化・異常気象・水や空気の汚染・資源の枯渇・絶滅危惧種の増加・数えきれないほど、不具合で満ちている。そして何よりも、経済や宗教や社会体制の相違などにより争いが絶えず、いつでも、どこかで戦争が絶える時がない。「知恵ある人」の学名は、返上する他ないだろう。

さてボノボは、知性はチンパンジー以上であり、１０００の英単語を理解する。３＋５は？と英語で問うとパネルの８を指さすという。初対面の人は、縫いぐるみの中に人がいると感じるそうだ。

＊

人工知能「アルファ碁」は、世界最高棋士に、４勝１負で勝った。それは過去の世界最高クラスの棋譜をディープラーニング（深層学習）の技術

を取り入れたもので、人類の知能を機械に学ばせ、その都度、最良の選択をさせる方法であった。

しかし、所詮は人の知能が源泉である。人口過剰であろうが資源枯渇であろうが、全人類が未来の子孫のために、環境改善に目を覚まし、自律性を重んじ、人類の存亡をかけて道を開けば、真の「万物の霊長」と言えるであろう。

地域に眠る埋もれた歴史（15）　木村　進

潮来と延方（三）

潮来市の少し北側にある延方の地方にあった水戸藩の郷校「延方郷校」と天狗党の悲惨な歴史などを見てきた。今回はこの郷校とは別な面の延方周辺の史跡などを回った。

○　愛染院

延方（のぶかた）から北浦に沿って北上するとこの通り沿いに「愛染院」というお寺が立っています。場所は北浦の入り江のようになった場所で「根本」と言う地名がついています。この根本地名は各地にありますが、仏教伝来で、その地域の最初の中心地が根本（ねもと、こんぽん）ではないかと考えたりしたことがありますが、ここの由来はわかりません。この寺は「東雲山愛染院根本寺」（真言宗）と言うのが正式名称ですが、地元では水原の観音様と親しまれています。水原はこのあたりの地名です。北浦がすぐ近くで、寺やすぐ裏山が聳えています。入口に立派な楼門があります。この楼門は鐘楼となっていて上部には釣鐘があります。この鐘楼門は潮来市指定文化財です。享保年間（1716～1735）の建立。

愛染院と呼ばれる寺院は全国にたくさんあり、ほとんどは愛染明王を祀っています。ここも愛染明王と観音様が祀られています。

「天喜5年（1057）年陸奥征伐（前九年の役）に出陣の途中、八幡太郎義家がこの地で難風に遭い、やむなく滞在したが、その夜、不思議な仏夢により深く感ずるところがあって、後冷泉天皇から賜った守護仏、如意輪観世音菩薩を安置し、武運を祈願したところ、難風がおさまったという。このため、衆生済度の根本の地として円通閣主を招き草庵を建立した。その後本堂を建立し、義家公の守護仏を胎内仏として如意輪観世音菩薩を安置している。元禄7年（1694）から堂宇の再建が行なわれ、宥範（ゆうはん）和尚を中興開山として迎えた。宝永元年（1704）には、麻生藩主新庄直隆公から再建記念として愛染明王像が寄進され、以後麻生藩主新庄家の祈願所となった。」とされる。

正面に立派な観音堂があります。潮来市指定文化財。享保4年（1719）の建立とされる。

源義家（八幡太郎）の守護仏を胎内仏とした如意輪観世音菩薩像は県指定文化財と言う。

北浦沿いにこのような立派な寺があることを知らなかったので最初に訪れた時に少し驚いた。四国の霊場と同じように山にへばりついたような寺ではあるが入口の門が3つにわかれている。3つの要素の寺院が一つになったものかもしれない。境内正面に観音堂がありその前庭に空海（弘法大師）？像が置かれ、北浦の方を眺めている。北浦はすぐ目の前である。

七福神の石像の隣にこの寺の由来が彫られていました。

「本寺は真言宗豊山派東雲山愛染院根本寺と称し、本尊は大聖如意輪観世音菩薩で本堂（観音堂）に祀られ、金剛愛染明王は金堂に祀られている。

寺伝によれば本尊如意輪観世音菩薩（高さ5.4㎝）は歴代の天皇の守護仏であり、平安後期天喜2年（1054）に後冷泉天王より源氏八幡太郎義家公に武運の守護仏として賜り、義家公兜の八幡座に奉持され、坂東武士一軍を率いて、奥州の安倍氏征伐に向かい、この水原の郷に来りしも、鹿島の郷に渡るとき難風にあい北浦を渡れず、やむなく数日滞陣され、里人の食糧などの持て成しをうけ、将軍その忠勤奇特を思い召された。ある夜不思議な霊夢により衆生済度の根本の地であることを感ずることあり、守護仏に深く帰依し、一軍の武運長久を祈り、草庵を建て観音菩薩を祀られたのが当寺の開基とされる。……」

そしてその隣に観音堂の脇から裏山に続く真っ直ぐな急な登り階段があります。この正面入り口の門には金毘羅大権現とあります。

ここが北浦の漁が盛んな場所であったのでしょう。金毘羅さんは漁の関係者の鎮守で、どこも海を見下ろせる場所に建っていることが多いようです。上には小さな赤い鳥居。八幡様です。また金毘羅宮の小さな堂宇があります。

○　妙光寺

行方市麻生の潮来寄りにあった「一乗寺」は、「築地妙光寺二十一世の日孝上人を迎えて初祖とした」と書かれていた。そしてその隣の山には羽黒（七面大明神）があった。この妙光寺は先に書いた国道51号線沿いにある恵雲寺もこの寺の上人により廃却を免れたともあったので、この潮来市築地にある「妙光寺」を見ることにした。築地は潮来市にあり大生の少し南側の地域で主要街道も走っていない場所だが、ここは実に不思議な場所だった。妙光寺は道をグネグネとナビを頼りにたどり着いたが、実に立派な寺であった。現地の潮来市教育委員会の説明板の内容をそのまま書きだしてみます。

「本圀山妙光寺

この寺は文永２年（１２６５）、宗祖日蓮大聖人の直弟子、中老僧一乗阿闍梨日門上人の開祖、当時隣村の水原村に居住していた油井但馬守国光、横山遠江守勝光が鎌倉参勤の際、日門上人を招聘し一宇を創立したのが始まりである。即ち本圀山妙光寺と号し、常陸国最初の日蓮宗の古刹である。

その後、正応３年（１２９０）中道院日正上人によって現在地に移転される。往昔は朱印等があったが、記書焼失のため上地となるなど一時退転の形勢となりましたが、十六世日遙上人の時、代官矢野九郎右衛門、郡奉行萩原庄右衛門、芹澤伊賀守、三木五兵衛等の力により水戸藩から費用を仰いで九間二七間の客殿を建立した。

元禄12年（１６９９）十九世徳大院日具上人の時、徳川光圀公より費用を下附され四間四面の本堂を造営した。堂内の日蓮大聖人の御尊像も同時に奉納され、また法華三昧堂の正面の額は光圀公自筆の書である。

二十世日孝上人の時、徳川綱條公より祈祷料として玄米五十俵を下附された。現在の本堂は寛永年間（１６２４～１６４３）の再建にして、寺宝には日蓮聖人直筆の御本尊並びに御消息断片、日門上人直筆御本尊、徳川光圀の書簡、光圀拝領の蒔絵法衣箱・状箱・硯箱、紺紙金泥法華経開結十巻などがある。……」

先の説明によればこの本堂は寛永年間（１６２４～１６４３）の再建という。説明も長くて読むのも大変だが、この寺は日蓮宗の常陸国では一番古い寺だそうだ。

本堂から少し上ったところにある「法華三昧堂」この法華三昧堂の額は光圀直筆だとの説明があった。この寺は緑も多くなかなか立派な寺であった。何故このような場所に寺ができたのだろうか。「築地」という地名にすこしかかわっているような気がする。

○　熱田神社（潮来市築地）

日蓮宗の寺として常陸国で最初に建てられたと言う「妙光寺」を紹介したが、この寺も水戸光圀の書が残されているなど水戸藩の庇護を受けていたようである。場所も元鹿島といわれる大生神社から南方へ２㎞ほどしか離れていない。この寺から800ｍほど南に同じ築地地区に「熱田神社」がある。地図を見ていると道路がこの場所に集中しているようだ。ついでと思い立ち寄った。街道から少し脇に入った場所の少し高くなった場所にあった。まわりは木々に覆われ古くからあることが分かる。鳥居のところに少し変わった表情の狛犬が置かれていた。

現地の神社由来の説明

「日本武尊、東征の折当地に立ちより、東は鹿島、南向香取、西方遥かに筑波の霊峰を望み、北は北浦に接し展望絶景高燥の地なるを以って戦勝祈願を行ったという。この地にあって尊の命に従い功のあった三十番神を褒め称えた。村人はその跡を都恵地（築地）と称し祠ありしが、大同元年（８０６）社殿をつくり日本武尊を祭神とし三十番神を合祀、尊崇した。延宝３年（１６７３）水戸藩主・光圀公巡視の折、由来を尋ねられ熱田神社の神号を賜る。」

少しわかりにくいので簡単に解釈すると、

・ヤマトタケルがこの地でこの辺りに住んでいた部族を退けたので、戦勝を祝って戦功のあった三十の勇者を讃えた。

・そしてこの地の名前を「都恵地」と名付け、後に「築地」となった。

・水戸黄門さんがヤマトタケルの戦勝記念の話を聞いて、草薙の剣が奉納されている熱田神宮と同じだと言うことで「熱田神社」と改名した。

とこんな意味でしょうか。

常陸国風土記では潮来については

「建借間命が兵を放って駆逐すると、賊は一斉に小城に逃げ帰って、門を固く閉ぢて立て篭もった。

すぐさま建借間命は計略を立て、勇敢な兵士を選んで山の凹所に潜ませ、武器を造って渚に並べ整へ、舟を連ね、筏を編み、衣張りの笠を雲と翻し、旗を虹と靡かせ、天の鳥琴とりごと・天の鳥笛とりぶえは波の音と調べ合はせて潮と流し、杵島きしまぶりの歌を七日七夜歌ひ踊って、遊び楽しんだ。この楽しき歌舞を聞いて、賊どもは、家族も男女も揃って出て来て、浜辺に群れて楽しみ笑った。建借間命は、騎兵に城を封鎖させ、背後から賊を襲って捕らへ、火を放って滅ぼした。痛く討つ言った所が、今の伊多久（板来）の郷であり・・・」（口訳・常陸国風土記より）

このあたりで地元部族をやっつけたのは「建借間命」であり、この後に水戸から那珂川へと攻め込んでいる。ヤマトタケルはこの後にやってきたのか？

ヤマトタケルの記述はその後に書かれていて、「田の里より南に相鹿（あふか）、大生の里がある。昔、倭武の天皇が、相鹿の丘前をかざきの宮に留まられたときに、膳炊屋舎（おほひどの）を浦辺に建てて、小舟を繋いで橋として御在所に通はれた。大炊（おほひ）から大生（おほふ）と名付けた。また、倭武の天皇の后の大橘比売（おほたちばなひめ）の命が、大和から降り来て、この地で天皇にお逢ひになったことから、安布賀（あふか）の邑といふ。」この「倭武の天皇」がヤマトタケルのことで、この地で東京湾で自ら海に入水して亡くなったとされる弟橘媛（おとたちばなひめ）に再会しています。この築地という地名も考えるとかなり深いものがありそうです。

さて、この神社の隣が空地になっていますが、「津知第二小学校跡地」だそうです。

前に二十三夜尊の隣りに「津知村役場跡」がありましたが、この築地村と辻村が合併して「津知村」ができていたので、その津知村の小学校だったようです。このような場所は何かの記事をきっかけにでもして出かけない限り、恐らく見ることも知ることもなかっただろうと思います。

○　鰐川

潮来の水郷というのは江戸時代に家康がそれまで江戸が湿地帯で水害も多く発生していたことから現在の東京湾に注ぎこんでいた利根川の流れを銚子の方の川につなぎ直すという大改革（利根川の東遷）を行なったことに端を発します。この東遷事業は１５９４年から１６５４年までの徳川三代将軍家光の死後までかかるが、これにより利根川上流からの土砂によりこの潮来付近には三角州ができ、そこを開拓して大きな耕作地が造られた。

潮来水郷観光の十二橋巡りなどというのもこの加藤洲といわれる開拓地の水路の両側の家々を行き来するために掛けられた十二の橋が続いている水路を巡るものだ。昔はサッパ舟が生活の一部となっていた風情を楽しむもののようだ。さて、この加藤洲ができたときに利根川と常陸利根川との間に北浦からこの常陸利根川に流れ込む流れのために三角洲が形成されないで大きな湖の形が残った。

これが外浪逆浦（そとなさかうら）という。この名前もなんとなくイメージとしてその湖の状態をよく表しているように思う。

普段は北浦から常陸利根川に水は流れ込むが、大雨の後などは利根川が増水して北浦に逆流する。また昔は海水も流れ込んだ。この北浦と外浪逆浦をつなぐ川を「鰐川」（わにがわ）という。何故鰐川という名前なのだろう。

この鰐川に鰐が棲んでいたという伝説が残っている。「普門院」に伝わる話である。普門院は北浦の先端、この鰐川の入口の位置にある。

そして、筑波山手前の宝篋山麓にあった極楽寺にやってきて常陸での布教活動をした高僧「忍性」が鹿島神宮の御神木の枝で彫ったという舟に乗った地蔵尊（船越地蔵）を本尊としている。

潮来市の広報「いたこ」２０１０年５月号の記事から紹介します。

「この地蔵が普門院船越地蔵として尊ばれたのは、この入り海の普門院前の水路は、潮の流れが速く、常に渦を巻く荒川であり、太平洋の海が逆流するため、いつしか鰐（わに）がすんで渡し船を覆し人々を取り喰う被害が絶えなかった。そこで近村の人々は、鹿島社に詣でお祈りをした。次の日、一人の僧が川辺に佇み、水上に向かい読経を始めた。すると水面にわかに逆巻が立ち、風を起こし、丈余（約３ｍ）の鰐の群れが出現し、回りながら太平洋に流れ去ったという。その後この僧は普門院の地蔵堂へ忽然とその姿が消えた。その後、渡船の事故もなく、五穀豊穣、人々は忍性作の船越地蔵を尊んだという。さて、この話をそのまま解釈してもしょうがない。その当時に日本の川や海に鰐がいたなどという記録は無い。そうすると思いだすのは「稲羽の素兎」（因幡の白兎）の話だ。子供の頃に歌も習った。大黒様（大国主）の話で出雲の話として出てくる。

♪♪　大きな袋を　肩にかけ
　　大黒様が　来かかると
　　ここに因幡の　白うさぎ

皮をむかれて　赤裸　♪♪

この歌も古事記などに出てくる神話が出典だが、神話の「国譲り」では今の日本や大和政権が統一する前に出雲に「国」がまずあったことの説明として話が造られたと考えられそうだ。

隠岐の島から本土に渡る手段がなかったウサギは鰐を集め、言葉巧みにだまして鰐を島から本土まで並べさせ、数を数えるふりをして鰐の背中を飛び跳ねながら本土まで渡ってしまいます。そしてウサギは渡り終えるとだましていたことをうっかり鰐にしゃべってしまい、怒った鰐によって皮をはがされてしまいます。

そして痛がって泣いているこの兎を八百神がうそを教え、兎は更に苦しみます。最後にやってきた大黒様（大国主）がこの白兎を助けてやるわけですが、この話は、この国が最初はこの出雲の神（大国主）が持っていたことの説明として使われていると解釈するとスッキリします。しかし、鰐は当時の日本にも恐らくいないであろうから一般には鰐（ワニ）ではなく「鮫」（サメ）のことだという説がかなり定説のようになっています。まあ鮫でもワニでもどちらでもいいようですが、大昔に波の荒れた海を見ているとまだ見たことのない鰐がたくさん泳いでいるように感じたのかもしれません。江戸時代になると波乗り兎の文様が流行りますが、月が海面に写ると、月に住む兎が波間を飛び跳ねているように見えたのでしょう。すると、鰐は荒れ狂う波のことなのかもしれません。このあたりは海からの流れと、北浦からの流れが渦巻いていたのかも知れません。今では利根川とは水門があって逆流もしない。もちろん海水は流れて来ない。逆流がないのです。洪水や水田にとっては水門の逆流は好ましくなかったのだがこのままでは霞ケ浦全体の水質は悪くなるばかりである。窒息しないうちに、時々吸ったり吐いたり息をさせてほしい。

○　なさか夕日の郷

潮来から神栖地区に入る境を流れる「鰐川」。この川は北浦から外浪逆浦という湖に注ぐ。この湖は常陸利根川の途中が膨らんだような湖で、利根川が銚子の方に東遷したことでこんな形になったものだろう。

国道50号線で潮来から神栖へ向かうとこの鰐川に架かる橋が「鰐川橋」である。そして、ここからもう外浪逆浦が始まるといってよいようだ。外浪逆浦は「そとなさかうら」と読む。

そしてこの川のすぐ近くにここから外浪逆浦に沈む夕日がきれいなことから「なさか夕日の郷公園」という小さな公園がある。ただこの近くは道が狭く入り組んでいて知らないと、少しまごつきそうだ。自転車や徒歩なら川沿いを行けばよい。展望台の上から外浪逆浦を眺めた。

天気もあまり良くなく太陽は見られなかったが、夕日がきれいなのだとか。

この川の東側は「神栖市下幡木（しもはたき）地区」と呼ばれる。このあたりの土地の開墾や開拓については鰐川橋の麓に「未来を創る大地」と彫られ碑が建てられていた。地図で水面を１ｍ上昇させると、このあたり一体は水面下になる。また潮来市側も徳島地区も水浸しです。そしてこの地区にできた広大な土地の開拓が行なわれたのは江戸時代です。

昔この徳島地区の広大な水田地帯を「延方」と「下幡木」のどちらの領地に含めるかということで取りあいとなった。この決着を江戸幕府が裁定を下し延方に軍配を上げた。そして喜んだ延方では地元の神社に相撲を奉納した。

それが、寛文13年（１６７２年）に鹿嶋吉田神社で始まった「延方相撲」です。しかし、このような低地は色々水害も多く発生し問題山済みだったようだ。私が東日本大震災の数ヵ月後に車で高速道路の「潮来」インターで降りて潮来市街に向かった時にこの付近を通った。道路は液状化で惨憺たる状況であった。

現在も潮来の日の出地区では連日道路工事が行なわれている。これは当時の復興もあるが新たにこの地区の開発を進めているようだ。

ここから息栖神社まで４ｋｍくらいだ。

昔東国三社（鹿島、息栖、香取）を巡ることが流行りました。この鹿島神宮から息栖神社に行くルートは小林一茶の日記などで比較的わかるようです。陸でつながっているのですが、参拝客は鹿島の大船津を舟で対岸に渡り、潮来から帆船？に乗り息栖や銚子に向かったようです。潮来は隣の牛堀なども風を待つ船が待っていて、風が海の方に吹き始めると急いで船に乗り込んだのでしょう。小林一茶が潮来で舟にのったのは早朝の5時頃。いっぽう吉田松陰が牛堀から舟に乗ったのはもう夕方になっていたようです。朝日が昇って夕方までは海から陸に風が吹いていたのでしょう。その風待ち港となったのが牛堀だったようです。今の生活ではなかなか想像がつきにくいです。

○　おわりに

水郷潮来とは別な角度で延方郷校を中心に周

辺を散策してみました。それによって水戸藩とのつながりが強かった流れも見えてきました。しかしここでも明治維新への国の形を変えた大きな流れの中で多くの若者たちを巻きこんで散った天狗党の歴史が浮かび上がって来てしまいました。これも一つの歴史の現実であり、避けては通れないことなのでしょう。
それぞれの地域にいくつかの顔が存在します。
そんな一つの顔を探れたと言う思いがします。

りゅうじんさまの恋

にわやまゆみこ

あきちゃんと村上の佐志能神社へ行った。今もちびちびと湧いている（らしい。確認不可）御神水ポイントに居たら、小学生が五、六人やってきて、
「おおー！〝フォース〟をかんじるぅ！」
と半分は本気で叫んだ。私がスターウォーズのパーカーを着ていたのはバレていないはず。
これは子供達に石岡の歴史を伝える絶好のチャンス！ おずおずと口を開いてみた。
「あ…、あのね、昔はもっと水が湧いていたんだけど、今はチョロチョロなんだって！」
「… … …ふぅ～ ん」
去ってゆく彼らの背を細い目で眺めながら引き続きの〝ベンキョー〟を肝に銘じる。
「さぁさ（笑）気を取り直して、りゅうじんさまへご挨拶に行こうよ！」
あきちゃんと私はズイズイと古びた鳥居をくぐっていった。
すると男のりゅうじんさまが、
「よくきたな」と出迎えてくれた。
「はぁ。なんの御用でしょう？」
「見りゃあわかるだろう？〝あっち側に渡れなくなっちまったのさ」
「はぁ。それはそれは。（うちら結構忙しいんですけど）」
確かに私が街を出た頃と比べても『龍神山』の真ん中はドカン！ とえぐれている。
「通りかかったナントカってやつでよ、ちょっくら乗せてくんねぇか？ あんたら〝あっち側〟にも行くんだろう？」
はて。私の車は四人乗り仕様だけど、りゅうじんさまは何人分に相当するんだろうか？ そもそも人ではないからノーカウント。ということにして、男のりゅうじんさまを肩に乗せて車まで連れていった。
走ること十ぷん。〝あっち側〟の染谷、佐志能神社前へ到着。
強い風がブワーッと駆け抜ける。男のりゅうじんさまは勢いよく車から飛び出し、三十路越えのあきちゃんと私を置いて先に山を登っていった。
子供の頃、お墓参りにはよくきていたけれど、頂上へ登るのは初めて。『自然環境を保護している地区です』という錆びきった看板とえぐれた山の構図がとてもシュールで不謹慎にも笑ってしまう。
途中、木の様子がおかしかった。そこらじゅうで、大きく広がった根っこごと地面からゴッソリと抜け出ている。
あきちゃんと、これを〝ラピュタ状態〟と名付けた。何故そうなったのかは知らないが、根っこの裏側を見れたことは貴重極まりない。
シャープな粘板岩のカッコよさに惚れながらやっとの思いで神社に着いた。
「遅かったな！」
男のりうじんさまは小さな蛇のようにとぐろを巻いてすっかりと日向ぼっこをしていた。
「あれ？ りゅうじんさま、彼女さんは？」
そういえば、女のりゅうじんさまの気配はない。
「見りゃわかるだろ?! 逃げられちまったよ！」
三十路のあきちゃんと私は女のりゅうじんさまの気持ちがよぉく解った。
「なんなの？ ハニー待たせたな、とでもいいたかったのかしらね」
「どおりで水もコンコンと湧かなかったわけよね」
あきちゃんと私も男のりゅうじんさまを置いてさっさと山を降りていった。
肩はすっかりと軽い。

県指定文化財（13）

兼平智恵子

新装された石岡駅西口一階に設置されたも催し物スペースに展示されてありました金丸町の弁財天さまと土橋町の大獅子にかわりまして先月五月二十三日より守横町の静御前さまと仲之内町の大獅子が展示されました。
交替しました守横町の静御前さま（当会報86号で紹介）と仲之内町の大獅子（97号で紹介）を簡単にご紹介いたします。
その前に今まで展示されてありました金丸町の

弁財天さまの手にしている物につきまして去る五月六日御来市頂いた熱心な我孫子市の文化を守る会の皆様からご質問がありました。

「なぜ弁財天さまが鍵のようなものを持っているのですか？」

「エッー、私もはじめて気がつきました！」

勿論お答えすることは出来ませんでした。

早速金丸町の語り部さん大高様をお尋ねしました。

「弁財天の財は、お金に関係し、いま風には金庫の鍵ということになるでしょう！　鍵は木製で銀色に塗られています。右手にこの鍵、左手には宝珠を持っていますよ！」

石岡の皆さんご存知でしたか、どうぞ今年のおまつりにはご確認なさって見て下さい。

（守横町の静御前さま）

石岡のおまつりに現在活躍している十二体の山車人形の中で、女性の人形は弁財天さまと展示されています静御前さまと二体のみになりました。

守横町では、浦島太郎、神武天皇、源為朝と何体かの人形の変転があったそうですが、埼玉県本庄市の米福人形展にて購入された、

静や静　静のおだまき繰返し

昔を今になすよしもがな

と誤解のもと源頼朝に追われた義経を慕って替歌で頼朝の前で舞う静御前の夫婦愛はうるわしく現代にも通じるとして守横町のシンボルにしたいという深い思いと意気の入った静御前さまということです。

（中之町の大獅子）

町内では紀年銘から現在確認できる最古の獅子頭で「富田のささら」「土橋町の大獅子」の次に供奉行列の露払いを務めています。重さ約二十四キロ、頭に宝珠型の珠を着け、三十余りの町内の獅子の中では一番大きい獅子頭を誇っています。

どうぞ石岡駅前西口にお立寄りの上、じっくりとご覧ください。

本題の茨城県指定文化財のご紹介に入ります。

○木造立木観音菩薩像　有形（彫刻）

指定昭和三六・七・二一

先月ご紹介しました西光院の境内にある立木観音菩薩像です。右手に蓮の花（蓮は御釈迦様の誕生を知らせるべく真先に花を咲かせたことから仏教と関連の深い植物と言われている）の蕾を持ち、慈悲の心で、見上げる私達を大きく包み込んでくれるかのようです。

平安時代、徳一法師が吉生村上根の奥山に開山したと伝えられる、立木山長谷寺高照院（明治の廃仏毀釈により廃寺となる）があり、立木観音像は高照院の本尊であったといわれています。この像は高さ五・九メートルで、一本の立木に刻んだものと推定されていますが、腕の一部が寄せ木であり、誰の作であるか不明ということです。

明治四十二年四月、吉生地区の方々の尽力により、高照院から西光院までの山道を整備して、堂宇とこの観音像を現在地に遷座させました。

昭和三十六年七月二十一日、県指定の有形文化財となり、次いで京都の美術院国宝修理所において解体修理が行われました。

立木観音像は全国に八体ありますが、大きさでは福島県会津の恵隆院の千手観音に次ぐ、第二位の十一面観音菩薩像として高く評価されています。

（参考資料・石岡の歴史と文化）

・盛り上がる緑　筑波の峰　智恵子

塚原卜伝

小林幸枝

以前に一度ご紹介しましたが、今回また鹿嶋市の塚原卜伝の銅像を見に行ってきました。

銅像は、鹿島神宮駅前の神宮坂の途中にある公園に建てられています。この銅像は、塚原卜伝生誕五百年を記念してたてられたのだそうです。

塚原卜伝は、１４８９年に、鹿島神宮の祠宮、卜部覚賢（吉川覚賢）の次男として生まれ、その後、塚原城の塚原安幹の養子となった。

卜伝は、実父吉川覚賢から鹿島中古流を学び、養父塚原安幹から香取神道流、また松本政信より神陰流を学び、奥義・一の太刀を完成し、将軍の足利義輝、足利義昭らに剣を教授した、新当流（加島新当流、卜伝流）の創始者です。

塚原卜伝の逸話で有名なのは、食事中に宮本武蔵に切り掛かられたとき、咄嗟に囲炉裏に掛けてある鍋の蓋を取って防御した、という話ですが、これは後に誰かが語った話で、事実ではありません。塚原卜伝は、１５７１に没しており、宮本武蔵は、１５８４年頃に生まれたといわれています。同じ年代に生きていなかったとはビックリしました。

霞ケ浦の周辺地域には、沢山の興味深い歴史があります。時間のある時に、ちょっと出かけて街々の歴史の跡などを見て回るのも楽しい事ではないでしょうか。

何を求めて（3）

伊東弓子

二十七年は一年を通して不安定な月日を過ごしてきたように思う。苦しい一年だった。弱っていただけが先行して行くのがわかっていたが、そこに大きな代償を抱えてしまうこと等予想もしなかった。

十二月十九日（土）第七回の古渡行き。師走も中半過ぎたのに何故行くのだろうと自問自答している私。現実からの逃避か、足は古渡へ向いていて出遅れた出発をした。

土浦を一時半のバスで出かけた。バスの中は殆ど眠っていた。何故こんなに眠いのだろう。古渡に引かれる気持ちは何なのか。あの日出合ったチラシを思い出した。古渡から大山の岬、その向こうに出島の半島、その後ろに行方の台が見えたのだ。

御留川請負の回状を廻す西廻りの出発点が古渡だ。六回も来たのにその事は確かめていない。だんだん考えていくことにしよう。

引かれる場所を反対から見る機会が訪れた。かすみがうら市田伏の岸から古渡を見た。右、土浦から大山の岬がつき出て、その奥に古渡がある。左の方に浮島があるのがはっきりわかる。（まるで独立している島のようだ）先日御留川を歩く会の下見をした時、歩崎観音境内の展望台から眺めてびっくりした。以前は、唯眺めていた景色が多少知識や経験が加わることによって関連づけて考えたり、見たり出来る喜びが生まれてくる。

二十年も前の出来事も古渡へ繋がっていた。夏祭りで金魚の店を出すことになり、知り合いの案内で玉造から潮来へ、そして成田へ続く道を急ぎ、広い田の中を随分走った日があった。金魚を養殖していた農家もこの一画にあることだろう。あの日のドライブも古渡へ続いていた縁を思う。実家へ行った帰り必ず阿見町を通るのが常だった。それは終戦直後、新しく出来た常陽中学校へ通った道だったから通らないでいられない気持ちだったのだろう。そんなある時、阿見医大の前をまっすぐ走って農村地帯に入った。小高い森を指して「あんばさまが祭られているよ」と、教えてくれたが気にもせずルンルン気分で、広い田圃を通り抜けた。詳しく聞くこともせず残念な気持ちが残っているが、再び訊ねているえにしを思う。

あれやこれや、思いにふけている中に古渡へ着いた。漁師宅は留守だったがお土産を置いて、町へ出て歩いていた。川に沿って枯草を分けて歩いていった。一夜城って何だろう。誰が造ったのか。十三塚、どこにあるのだろう。ほーいほーい地蔵もあるとか。十三人の中十二人が首を切られた。一人遅れた人が「おーい、おーいわしもだ」と追っていったとか。その一人がほいほい地蔵になったとか。散歩途中の人が教えてくれたが、上の空で聞いていたのか、脳が病んでいたのだろう、はっきり記憶がない。北畠親房の話しも聞いたような気がする。千葉の方から海を越えて来た。新治の方へ行ったらしいとのことだった。疲れもとれて頭も真面になるこの地の歴史も調べてみよう。

夫を捜しに出た若い女には合わなかった。堂の前に私とおない年位の女が座っているのが見えるようだ。きっとあの女の人の姑であろうか。髪もすっかり白く、腰も曲がり疲れ切った様子だ。きっと息子を捜しに来たのだろう。私は前を通り過ぎるのも憚り、じっと枯草の中に座り込み川の流れを見ていた。物凄い音で走り去るダンプカーの音に顔を上げた時にはもういなかった。

やっとの思いで家路に着いたが、心の奥では一人満足していた。

年明けて一月九日（土）は行かなかった。禁漁に係るので早目に切り上げてその後、陸平へ行って餅つきをしたようだ。この日の漁では公魚が沢山捕れたとのこと。

二月は禁漁なので皆行かないとのことを聞いた。かすみがうら市で地域活性の為、地元の農業、漁業、販売、飲食店あげてとりくんでいく必要ありの話しをしてくださった岩崎先生も、この古渡で会の一員だったそうだ。お互いに熱の籠った話し合いも聞かれそうだ。

三月五日（土）は漁の日だったが、奥さんが急に亡くなられたので、皆躊躇したが漁は行い、漁を済ませた後お悔やみさせていただいたとのこと。

三月二十日（日）改めて漁をしたとのこと。捕れなかったようで、漁師さんの話しによると、

「首つるようだ。バケツに半分位だった」

グルービル何匹か、たなご、大部分はわかさぎだった。不漁なのは天候の変化からかと考えているとのことだった。春は漁もよくなるだろうか。

「いつも元気のようでいいね」と言ってくれる友が多い。そんな時いつも答える。

「体の中は見えないからわからないよ」と。笑顔を作りながらも、現実の体を考えるとひやひやしながらの返事をしている日々。愚痴愚痴言ってないで、健康診断を受けてこよう。春には明るい表情になるだろう。

【風の談話室】

《読者投稿》

私の国府巡り『佐保路』

京都府精華町 今井　直

「奈良」と言えば、「大仏さんと鹿」をほとんど人が連想する。観光シーズンになると、奈良公園は今も昔も行楽客であふれる。この数年は中国・韓国や東南アジアからの旅行者が圧倒的に多い。私は中韓の人たちにはことさら親切丁寧に接し、時には案内してあげることもある。反日・嫌日の国だが、庶民レベルではそうではない。訪問客が旅を楽しむ姿を見るのは、私も嬉しい。もしかすると帰国して、「日本はなんて良い国だろう」と、口コミで広まるかもしれない。ささやかな庶民外交だ。

奈良の観光業界は、実は厳しいそうだ。まるで街そのものが博物館と言われるほど文化財が多く、かつては黙っていても修学旅行生が来てくれた。今や観光客は京都に宿泊し、奈良へは日帰り旅が一般的だという。神戸のようにおしゃれな街でもなければ、大阪みたいな爆買いの街でもない。特に旨いものも天然温泉もなく、大仏さんと鹿などの観光では、経済効果が少ない。色々とイベントを催したり、古民家をゲストハウスに転用したり、先を見越してリニア新幹線の誘致に力を入れたりと、頭を悩ませているそうだ。

奈良公園は築地や柵などがなく、三百六十五日二十四時間常に無料解放されている。公園が誕生した百三十六年前からバリアフリーだったわけだ。公園内に千二百頭ほど生息するという鹿は、国の天然記念物に指定されている野生動物である。車道を闊歩し、寺院や商店はいうまでもなく、県庁の中にまで堂々と入ってくる。鹿は春日大社の神の使いとして、古来より愛護されてきたから、人にすっかり馴れている。初夏には産まれて間もない仔鹿が愛嬌を振りまき、その可愛い姿に誰もが目を細めてしまう。奈良公園の広大な芝生の維持管理は、あまり手間がかからない。芝は常に鹿たちに摘み取られ、鹿の糞は虫や微生物が分解し、土に還るという生態系が保たれているからだ。野生の鹿と人間がうまく共存し、他に類例のない公園に外国人旅行者は驚嘆するようだ。

東大寺大仏殿の北側に、今は礎石だけが残る講堂跡がある。観光客が少なく、鹿たちものんびりと群れ集まるスポットのひとつだ。ここに、「おかっぱ桜」という大きなしだれ桜が二本ある。淡紅色の桜の花が周囲の豊かな緑と調和してとても美しい。垂れた枝は地面から二㍍ほどの高さで下の線が揃っていて、子供のおかっぱ頭のように見えることからその名がついた。これは鹿の仕業である。鹿は食欲が旺盛で芝など下草だけでなく、後足で立ち上がり、背伸びをして届くのはたいていい食べてしまう。毒のある馬酔木などは敬遠するが、柔らかい枝葉は新芽のうちに食べ尽くしてしまうため、横一文字に揃っているのだ。そのため遠くまで見通しがきき、開放感のある心地よい空間ができる。これは奈良公園独特の景観で、「ディアライン」(Deer Line)と呼ばれている。

おかっぱ桜から歩いてすぐの所に正倉院がある。このたび大修理を終え、校倉造の外構は平日に公開されている。毎年秋に、たくさんの人が正倉院展を見に国立博物館へ押し寄せるが、正倉の建物まで見学する人は少ない。その西側にある転害門（てがいもん）は、平重衡（たいらのしげひら）の兵火（1180）などにも焼け残り、法華堂（二月堂）や正倉院とともに、現存する創建以来の貴重な伽藍建築である。

転害門からまっすぐ西へ続く道は、平城京の一条大路の名残で、近くを佐保川が流れることから「佐保路」と呼ばれる。幕末のころ奈良奉行が佐保川堤に植えたと伝わる桜並木が美しい。『万葉集』に歌われた佐保川も、大宮人がそぞろ歩くロマンチックな地であったようだ。この辺りは、なだらかな平城山（ならやま）の丘陵を北に背負い、左大臣・長屋王の別荘や大伴氏・藤原氏など貴族の大邸宅が立ち並ぶ高級住宅街だったと言われる。佐保路を巡る「歴史之道」の途中、大伴家持が住んでいたとされる辺りに、家持の歌碑がある。

わが宿の　いささ群竹　吹く風の
音のかそけき　この夕べかも

（万葉集　巻十九―四二九一）

「天平勝宝五年二月、家持が佐保の自邸で詠んだ歌」と添え書きがある。家持が詠んだ五百余首のうち最高傑作と言われる歌だが、瀟洒な民家のそばで歌碑が自己主張していないのがよい。

佐保路の西端には法華寺が位置する。つまり、佐保路は総国分寺と総国分尼寺を結ぶ道筋ということになる。東大寺は総国分寺とされているが、不思議なことに東大寺境内で、碑文や案内板に「総国分寺」の文字を見かけたことがない。東大寺発行の小冊子には「華厳宗大本山」とあり、「総国分寺」とはどこにも書かれていないのである。天平十三年（741）の聖武天皇による「国分寺建立の詔」にも、この文言は出てこない。東大寺はかつて広大な荘園を領有し、地方に大きな支配力を

有していたのは確かである。しかし、東大寺が総本山として、全国に置かれた国分寺を実質上どのように総括していたのか、また特定の国分寺とどのような関わりがあったのかは、分からない。

東大寺が総国分寺として認識される状況証拠はたくさんある。聖武天皇が創建に深く関わったこと。「国の華」の象徴であった七重塔が東と西にそびえていたこと。諸国の国分寺の本尊は丈六（約4.8㍍）の釈迦牟尼仏であったが、東大寺の本尊は約15㍍の盧遮那仏で、盛大な大仏開眼供養が行われたこと。唐僧・鑑真を招き戒壇院を設立したこと。そして平城京に面した西大門に、縦横がほぼ三㍍の大きな扁額が掲げられていた。額面には、聖武天皇宸筆と伝わる「金光明四天王護国之寺」の文字が、端正な楷書で刻まれている。国分寺の正式名称だ。私は東大寺ミュージアムで扁額を見たが、なぜか「国」の字が、くにがまえの中が「玉」でなく「王」であり、聖武天皇が自身の立場を誇示しているとみるのは、穿ち過ぎだろうか。額面の周囲には、四天王など八体の仏像彫刻が付けられていて、東大寺の正門にふさわしい風格が感じられる。西大門は戦国時代に倒壊し、その後再建されなかったが、現存する南大門に匹敵する規模の正門だったようだ。ちなみに南大門には「大華厳寺」の扁額がかかっている。東大寺が総国分寺であるという文言がなくとも、国分寺を代表すると意識されれば充分だったのかもしれない。

聖武天皇と光明子は同じ年に生まれ、十六歳にして結婚した。しかも二人は甥と叔母の関係にあたる。光明子は藤原不比等の三女であり、聖武の母・宮子は不比等の長女で、光明子の異母姉になる。複雑な系譜だ。父親を同じくする娘たちを母と妻に持つのは、現代ではとても考えられない。

すでに不比等は朝廷の中枢にあり、大宝律令制定や平城京遷都を遂行した辣腕の実力者だ。しかし、不比等には娘を皇后にするという更なる野望があった。四人の息子たち（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）も、政敵を次々と蹴散らし、最強のライバル長屋王を倒して妹をサポートした。そして遂に、光明子は初めて皇族以外の皇后に就く。それまでは、推古・皇極・持統天皇のように、天皇が崩御すると、妻である皇后が皇位を継ぐ位置づけから、皇后になれるのは皇女だけというのが慣例であった。光明子が皇后の地位を得たのは、明らかに藤原氏のゴリ押しによるものだった。

病弱な父・文武天皇が二十四歳という若さで崩御したとき、聖武はまだ六歳と幼く、即位は先延ばしにされた。文武の母である元明天皇、さらに文武の姉・元正天皇と続き、結局、十七年にわたって女帝二人が皇位を継承した。皇統に藤原氏の血筋を入れてなるものかと、抵抗する皇族側の意図が見える。「息子から母へ」そして「母から娘へ」の皇位継承は、異例であり前代未聞であった。

聖武は不幸な人である。母・宮子が精神障害を患っていたため、長らく実母を知らずにいた。病気が平癒した母と対面できたのは、三十七歳の時である。聖武は二十三歳でやっと即位し、光明皇后が待望の男児を出産するが、生後一年に満たず夭逝した。また、度重なる大地震にみまわれ、干ばつ・飢饉が続く。平城京では天然痘が蔓延し、政権を担っていた皇后の四人の兄たちも疫病に罹り、瞬く間に相次いで他界した。大宰府で藤原広嗣が兵をあげ、民衆の騒乱が頻繁に起きる。聖武自身も病気がちになり、全てが不安定な状態に追い込まれた。「これは何かの祟りだ。平城京は呪われている！」どんな強靭な心の持ち主でも、安眠できず情緒不安定になったであろう。

聖武と皇后は、仏の慈悲にすがって怨霊の祟りを鎮めようと、全国に国分二寺を建立し大仏造立に取り組んだ。光明皇后は、薬草を集め病人や孤児のための医療施設「施薬院」や、貧民の救済施設「悲田院」を設置して、慈善や福祉に力を入れる。また、薬草を煎じた浴室（からふろ）［今で言うミストサウナ］で、皇后が自ら千人の衆生（しゅじょう）の垢を流し、多くの難病者を救ったという伝説まで生れる。

天平期は、国際色豊かで華やかな仏教文化が咲き誇ったが、民衆は重税や強制労働で貧困にあえいでいたのである。

不比等の邸宅は、平城宮の東に隣接して築かれていた。一等地である。不比等の死後、光明皇后が譲り受け女人修行の根本道場とし、こうして「法華滅罪之寺」が誕生した。創建当時は七堂伽藍を備えた堂々とした尼寺だったという。法華寺は、平安京に遷都してから荒廃したが、長い歳月を経て復興がなされ、今は小ぢんまりとした佇まいである。本尊の十一面観音立像は、目鼻立ちがくっきりとしていて、朱い唇が印象的な像高一㍍ほどの一木造りだ。光明皇后の姿を写したと伝えられる。水瓶（すいびょう）を左手に、下げた右手は風に揺れる天衣（てんね）をつまむ。少し腰をひねり、右足の親指をピンと立てて歩みだす動きのある姿である。

法華寺は、斑鳩の中宮寺・山村の円照寺と並んで、大和三門跡に数えられる品格ある尼寺である。（門跡は皇族などが出家して跡をつぐ寺院）法華寺南門の前

に、先年亡くなった久我高照（こうしょう）門跡尼の筆による「総国分尼寺 法華滅罪之寺」の寺号標が建つ。門跡尼は、往年の名女優・久我美子さんの叔母にあたるが、「くが」ではなく「こが」が正しいとのこと。尼寺らしく境内は常に手入れが行き届き、清々しい雰囲気が漂う。御所より移された名勝庭園では、建物の障子にまで菊の御紋が入っている。

佐保路に聖武天皇と光明皇后の御陵がある。松並木を進むと、御陵が寄り添うように並んでいる。東の方に目をやれば、お二人が篤く仏教に帰依し、その結晶である大仏殿の甍が輝いて見える。

大仏殿の裏手に、歌碑が一基さりげなく置かれており、それには光明皇后が聖武天皇に贈った歌が刻まれている。

わが背子と　二人見ませば　いくばくか
この降る雪の　嬉しからまし

（万葉集　巻八―一六五八）

権力を掌握せんと台頭してきた藤原氏。その一族の切り札である光明子がみせた、愛する夫を思慕する一人の女としての可愛い一面である。

養生日記

堀江実穂

「消えていく」

感受性が強かった私
涙もろかった私
喜びも笑顔も表現が豊かだった
変わってしまった私の心
美しい花を見ても美しいと思えない
きれいな夕焼けを見ても感動しない
可愛い赤ちゃんを見てもあやせない
無表情な私を見て怖がる赤ちゃん
元気な子供たちの笑い声もただうるさいだけ
大好きだった赤ちゃんや子供達も可愛く思えなくなった
何も感じなくなった自分の心が悲しい
自分が自分でなくなっていく
心が消えていく
子供達と一緒に遊んだ鬼ごっこやダルマさんが転んだを楽しんだ時間は遠い彼方に過ぎてしまった
私の思い出が心と一緒に消えていく
養生日記が病状日記になっていく

《風の呟き》
馬と鉄砲

打田昇三

内容は兎も角、平和を口にしていれば立派な国民だと思われそうな現代には相応しくない話で恐縮だが、日本に鉄砲が伝来したのは戦国時代の初期、天文十二年（一五四三）とされている。織田信長や豊臣秀吉は未だ小学生、徳川家康は乳幼児託児所に預けられていた頃になる。

器用な日本人は種子島に伝わった一丁の鉄砲を研究材料にして数年間で火縄銃を量産できるようになったと言う。先が見通せる織田信長は其の鉄砲を大量に買い集め、天正三年（一五七五）旧暦五月二十一日には長篠の合戦で勇猛を誇った武田騎馬軍団を火力により壊滅させている。其の日は梅雨の真っ盛りで、雨が降れば当然だが火縄銃は使えない。鉄砲無しの戦いも考えた信長は家康の援軍と合わせて三万三千の兵を揃え陣地の前には頑丈な馬止めの柵を構えて待っていた。

武田勝頼が率いる甲州勢は一万三千、鉄砲も少しは持っていたようであるが、伝統を誇る騎馬軍団が一気に攻め掛かる戦法を売りにしていたから其の日もいつもどおりの攻撃を仕掛けた。雨が降りそうで降らず、武田騎馬軍団は敵陣の前まで行かせて貰い、其処で一斉射撃を受けて全滅に近い状態になった。総大将・武田勝頼は天目山に逃れて自害し武田氏は滅びた。「無鉄砲」という言葉があるが、其の通りの負けになったのである。

ところが世の中には辻褄が合わない話が多いようで、種子島に銃が伝わる十数年も前に、甲斐の武田氏に火縄銃が伝えられた…とする話がある。大永六年（一五二六）、形だけだが第一〇五代・後奈良天皇、将軍は室町幕府第十三代・足利義晴の時代になる。武田氏の当主は第十七代の左京大夫信虎と言う。武田信玄の父親である。

武田一族の祖先は常陸国出身であり、後に徳川家康によって水戸から秋田へ移された佐竹氏と同族の源氏系武士団である。武田信虎は八幡太郎義家の弟・新羅三郎義光から数えて十七代目になる。息子の武田信玄とは仲が悪かったので、残虐な武将と言う話しか伝わっていないが、文字通り虎のような猛将と言われた。其の信虎の時代、種子島にポルトガルの商船が漂着して鉄砲が伝来したとされる時期より十七年も前のことだが、種子島出身で、密かに異国との交易に従事していた或る日本人商人が居て偶然に鉄砲を手に入れた。製造元は矢張りポルトガルらしい。是を落ち目の足利将軍の下で犇（ひしめき）合っている大名に売り込もうと考えたのだが、当時の大名は大内、毛利、今

川、北条、伊達などが団栗の背比べのようにしている状態で優劣が付け難い。そうした中で貿易商人が目を付けた人物が武田信虎であった。

密かに甲斐の国を訪れた商人は「種子島新佐衛門」と名乗り、自分の経歴を述べてから信虎の前で実弾射撃をして見せた。ポルトガル製の火縄銃であるが弾丸は火薬で飛ぶから威力が凄い。商人の新佐衛門は実弾射撃に使った銃を信虎に献上して更に多数の注文を受けるつもりであったのだが鉄砲の威力に驚いた信虎は、情報が他の戦国大名に知られることを恐れ、鉄砲の伝来を秘密とした上で其の存在を封印してしまった。

武田軍団は頑丈な甲斐駒を駆使して戦う伝統の騎馬戦法に拘り続けたのである。それを象徴するのが「長篠の合戦」であるが、騎馬止めの柵と鉄砲の併用は織田信長の発想であったろう。戦国時代も大きな転換期を迎えていたのである。

狼の吼え声

菅原茂美

犬どもよ、よく聞け！お前達の先祖は我ら誇り高き狼なのに、忘れてしまったのか？ろくでなしの人間などになぜついて行った？人に飼われ、シッポを振り、腑抜けの家来になどなり下がって…。日本で我らを滅ぼしたのは彼奴らだぞ。外国のジステンパーなどを俺達にうつし、北海道では明治政府の気違い共が、懸賞金をかけて俺たちを殺した。そのせいで今、知床にエゾシカが増え過ぎ慌てふためいている。それにつけても昔の人は偉かった。農耕民族の最大の敵は鹿や猪だ。それを退治してくれる俺たちを「良いけもの」即ち「狼」と名付け、狼を守り本尊とする神社も多数ある。

そしてイソップの童話など糞くらえだ。我らを悪魔扱いしている。人間のご都合主義だ。犬共よ、お前はそんな悪党に、なぜシッポを振る？

人間の不見識により、お前達は姿・形をメッチャ変えられた。オモチャにされ、野生の本能は、そぎ落とされてしまった。独善だらけの「人」とやらの思いのままで、一体お前達は幸せなのか？反撃してやれ！噛みついてやれ！チット脳味噌を膨らましたぐらいで、何が「万物の霊長」だ？森羅万象に君臨したつもりで、威張りくさっているあの輩の鼻をあかしてやれ。多くの動植物を根絶やしにして、環境破壊でメチャクチャ。そのうち自分達の子孫さえ残せなくなる超愚か者だぞ！主を選ぶならもっとよく見て選べ！人のやっている事はケンカばかり。ケンカの道具作りに明け暮れて、偉大な文明を築いたとか寝言を言ってる。そんな奴は見限って、その鼻をへし折ってやれ！

そしてお前達は、さっさと俺達の所へ戻って来い。俺達の遠吼えの真の意味がわからんのか。耳を澄ましてよく聞け！お前達の遺伝子は、別れた時と殆ど変っていない。俺たちと恋の歌を思いっきり唄え。俺たちとかわいい子供を、しっかり造ろうじゃないか。恐れずに戻ってこい。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第四 -（四）

橋合戦（はしがっせん）のこと

平家物語原文には源氏の事だと手抜きをしたのか途中省略をしているが、源平盛衰記には前の章段に「宮（以仁王）は御馬に召して既に寺を出させ給ひけり…」とある。そして「橋合戦」では…

宮は三井寺から（逃げて行く先の）宇治との間、三里（十二キロ）程の途中で六回も馬から落ちてしまった。これは前の晩に寝られなかった所為である。落馬しても大した怪我もせず宇治に到着された。そこで源頼政らは、追って来る敵（平家軍）を防ぐために橋柱四つ分の橋板を取り払った。

以仁王は平等院に入れて貰って休息をとった。寝ていなかったからぐっすり寝込んだのである。武士たちも寝ていなかったのだが、こちらは平家軍が攻めて来るから寝ては居られない。

一方、平家のほうでは「以仁王を始め、三井寺に居た僧兵たちは南都（奈良）へ逃げ込むようである。追い掛けて討て！」と世界大戦に突入するような大軍を編成して出動することにした。先ず大将軍は四名も居て、左兵衛督知盛（さひょうえのかみとももり＝清盛の四男、兵衛督は中将級）、頭中将重衡（とうのちゅうじょうしげひら＝清盛の五男、天皇側近である蔵人の長で中将を兼ねる）そして清盛の二男・基盛（早逝）の子である左馬頭行盛（さまのかみゆきもり＝左馬頭は馬を扱う官庁の長、従五位相当）、薩摩守忠度（さつまのかみただのり＝清盛の末弟、巻第一「鱸」に母親のことで登場）が任命された。

次に実戦を指揮する「侍大将（さぶらいたいしょう）」は平家家人の上総守忠清、其の子・上総太郎判官忠綱・飛騨守景家、其の子・飛騨太郎判官景高、忠清の子で後に日本中を逃げ回ったため各地に伝説が残る悪七兵衛景清、そして平家庶流の越中前司盛俊の子である高橋判官長綱と弟の越中次郎兵衛尉盛継、

その他に河内判官秀国とか武蔵三郎左衛門有国などが任命され、合わせて二万八千余騎の軍勢が現在の宇治市に在る木幡山を越えて宇治橋のたもとに押し寄せた。

「船頭多くして舟、山に上（のぼ）る」と言う諺もあるから、大将軍だの侍大将だの高級管理職が数え切れないほどいる平家軍が戦場でどうなるのか心配な面はあるが、迎え撃つ源氏軍は市民運動会程度の人数しか居ないのであるから最終的には平家軍が勝つ。最初から敵が集結している平等院に向かって「鬨の声（ときのこえ）」つまり合戦開始の宣言を三度も発した。以仁王を大将に仰ぐ源氏軍も其れに合わせて声を出したが、二万八千と千人では歌合戦でも勝負にならない。尤も此の数字は誇張であり、実際には平家方が三百余騎で宮様方は五十余騎しか居なかった、とする説があるから合戦の話は数字抜きで読むしかない。

其れは兎も角、原本に従って話を進めると勢いに乗った先陣の平家軍が宇治川に到着した時は既に橋が落とされていた。其れに気付いた兵たちが「止まれ！止まれ！」と叫んだけれども後のほうには聞こえないから遠慮なく押してくる。戦場であるから功名心が先立って猪突猛進すれば良いと思っている連中に押されて、先ず平家軍は二百騎ほどが合戦前に溺れてしまった。

やがて両軍が宇治川を挟んで対峙し定石通りに矢合わせの戦さが始まった。守備軍の以仁王陣営には、大矢の俊長、五智院の但馬、渡辺党の省（はぶく）・授（さずく）・続の源太など弓の強者が居て、彼らが射掛ける矢は敵兵の鎧とか楯などを遠慮なく射抜くから平家軍に大きな被害を与えた。

けれども敵の数は減らない。源三位入道（頼政）は、位（くらい）の高い老人が着ると言われた長尺絹の衣装に羊歯（しだ）模様の鎧を身に着け、死を覚悟したように兜は着けずに居た。息子の伊豆守仲綱は赤地錦の直垂（したたれ）に黒糸威（くろいとおどし）の鎧という、戦記物ではお馴染みの衣装に、これも兜は着けずにいたのだが、仲綱の場合は弓を引くのに邪魔なので（より強く弓を引くため）兜を外して戦っていたのである。

これから後、暫くは平家軍を相手に孤軍奮闘した源氏方僧兵たちの活躍ぶりが紹介される。そのうちに五智院の但馬（たじま）という僧兵が大長刀を持って只一人で、壊された橋の平等院側に進んで来た。それを見た平家軍は「あの者を射止めよ！」とばかり弓の上手な者たちが反対側から一斉射撃をしてきた。しかし但馬は少しも慌てずに、高い矢は掻い潜り（かいくぐり）、低い矢は飛び越えて避け、向かって来る矢は長刀で斬り落として当たらなかった。それが見事であったから合戦をしていた両軍の兵たちは自分の立場を忘れて暫くは見物をしていた。「連れて逃げてよ！」という歌詞の「矢切りの渡し」という歌謡曲があったけれども、逃げずに踏み止まった五智院の但馬は「矢斬りの但馬」と言われたのである。

また「堂衆（どうじゅ）」と呼ばれた身分の低い僧兵の中にも豪の者が居て、筒井の浄妙明秀は濃紺の布で出来た直垂（したたれ）に黒革胴の鎧を着て、錣（しころ＝垂れ）が五段になっている兜を被り、鞘を黒漆で塗った太刀を身に着け、背に着けた二十四本の矢は鷲の両翼の付け根に生えている黒い羽を付けたもので、弓は「塗籠籐（ぬりごめどう）」と言って籐蔓（とうづる）を隙間なく巻いたものを用い、白木の柄の大長刀を持って橋の上に進んでから、平家方に向かって大声で名乗りを上げたのである。

「日頃から音にも聞いて居るであろう。今は目を開けて良く見よ！我こそは三井寺僧兵の中でも武勇をもって知られた筒井の浄妙明秀という一騎当千の強者（つわもの）である。我と思わん者は進み出て勝負をせよ。いざ見参！」…正直なところ、余り聞かない名であるから平家方でも返事に困っていたようで反応が無かった。

怒った明秀は二十四本背負っていた矢を次々と発射して即座に十二人を射殺し、十一人に傷を負わせた。箙（えびら）と言って矢を背負う道具には通常の場合、矢が二十四本入る。明秀は二十三本使ったから一本だけ矢が残った。そこで明秀は弓と矢一本を容器ごと捨てて、履いていた皮靴を脱いで裸足になり、橋桁を渡って平家軍の方へ進んで行ったのである。橋桁といっても誰もが渡れるような幅は無い。明秀は京都の一条、二条に架かる大橋を渡るように振舞って平家の陣に斬り込んで長刀で五人を倒した。六人目の敵と対戦中に長刀が折れたので是を捨て太刀を抜いて戦った。

敵は大勢である。蜘蛛の手足のように四方八方に斬りまくり、或いは太刀を振りまわし、或いは方向を変えるなど縦横無尽の活躍で八人を討って九人目にかかった時に、太刀が敵の兜に当り元から折れてしまった。仕方が無いので川に飛び込んだが、身に着ける武器は鍔（つば）無しの短刀だけである。死を覚悟して暴れるしかない。

また源氏軍の乗円坊阿闍梨慶秀配下に居た一来法師は大力で知られた人物であったが橋桁上の合戦では前へ出なければ思うような敵に逢えない。行列の前に居た明秀の兜を抑えて「御免なさい」と言いながら肩越しに越えて前に出た。縦横無尽に戦ったけれども討死し、続いて前に出た浄妙坊も一暴れして

から退いて平等院門前の芝生に鎧を脱いで見ると当った敵の矢が六十三本あり、鎧の裏まで抜けて傷になった矢が五本もあった。

普通の者ならば自分の身体に六十三本も矢が刺さって居れば其れだけで気絶するが、五か所も射られながら淨妙坊は「急所を外れている」と傷口に消毒・止血の灸をすえた。熱いのと痛いのをどうやって我慢したのであろうか。それから頭を白衣で包み、僧兵の正装をして、弓を杖に下駄を履き念仏を唱えながら奈良の方へ退いていった。

「勇猛果敢」を通り越して怪物のように暴れた淨妙坊の活躍を目の当たりにした源氏軍は三井寺の僧兵、渡邊党の武者たちが「負けじ！」と敵陣に攻め込んだ。両軍が川（橋）を隔てての激戦であるから敵の首を獲って来る者、獲られる者、大怪我をして腹を斬り川に飛び込む者などが入り乱れて橋の上の戦さは、火事で橋が焼け落ちるまで続いたのである。其の様子を見ていた平家方侍大将の上総守忠清が大将軍の前に出て「あれをご覧下さい。どうも橋の上の合戦では敵が優勢です。

宇治川を渡河して一気に攻めれば良いのですが、今は五月雨の季節で川水が増えており（合戦の冒頭で犠牲者が出たように）馬も人も失われる数が多くなります。少し下流の淀（よど）か一口（いもあらい＝久世）へ回るか、或いは河内路へ迂回させる方法をとりたいと思います」と言っているところに、下野国の住人・足利又太郎忠綱が進み出て次のように皮肉を込めて言い放った。

「淀、一口、河内にはインドか中国の外人部隊を差し向けて下さい。此の攻め口は我ら足利勢が向かいます。目の前の敵を討てず是を奈良に入れた場合には、吉野・十津川などに潜む源氏勢が集まって来て大事になるでしょう。私は東国の者ですから東国の話をしますが、武蔵と上野の国境に利根川と言う大河があります。以前に秩父と足利の者が合戦を致した際に、大手は長井（妻沼）の渡り、搦手は古河と少し上流の館林付近から攻め寄せましたが、上野国住人新田入道が足利に説得されて秩父を裏切り、杉の渡りに準備して置いた船全部が敵に壊されてしまったことがあります。其の時に一同が思ったのは“今、此処を渡って攻め寄せなければ、後の世までも武士の恥となる。

水に溺れて死なば死ね！いざ、渡らん“ということです。そこで馬を筏（いかだ＝木材を縛って舟のように水上に浮かべたもの）のように組み一団となって大河を渡り、敵を討ちました。東国武士は敵を目前にして川があろうと沼があろうと躊躇う（ためらう）ことは有りません。宇治川の深さ流れの速さを利根の大河に比べても優劣は無いでしょう…さあ、行くぞ！」と、関東勢に声を掛けるより早く、宇治川に馬を乗り入れた。

是を見た大胡・大室・深須・山上、那波太郎、佐貫広綱四郎大夫、小野寺の禅師太郎、戸屋子（へやこ）四郎など同族の武士たち、郎等では宇夫方次郎、切生（きりう）六郎、田中宗太など三百余騎が後に続いた。足利忠綱は川の中から大声で指示を出したのだが、是がしつこいほど長い。

「強い馬は上手（前）に立て、弱い馬は下手（後）にして、馬の脚が川底に届く間は手綱を使って歩ませよ。馬の脚が川底に届かず、馬が跳ねるような動作を始めたならば、自由に泳がせよ。水中で流されそうな者が居れば弓に取り付かせて、手を組み肩を並べるようにして渡すべし。騎馬武者は鞍（くら）の中央部にしっかりと腰を下ろし鐙（あぶみ＝騎馬武者が足をかける部分）を強く踏め。馬の頭が沈みそうになれば手綱で引き上げよ。その際に手綱を強く引き過ぎて馬に覆いかぶされないように注意せよ。乗り手の身体が水中に浸かるようになったならば、身体を鞍から外して馬の尾に近く腰を移せ。馬には優しく、水には強く当たれ。川の中では（渡河中には）弓を引くな。敵が射掛けてきても河の中からは應戦するな。常に兜の錏（しころ＝垂れ・防具）を傾けて顔面を射られないようにせよ。然し、傾け過ぎて兜のテッペン（空気穴）を狙われないようにせよ。川の流れに直角に渡ると抵抗が大きくて流されるから注意せよ。流れに逆らわず、水流を利用するようにして渡れ」聞いた部下は半分も覚えていない。そういうことは川に入る前に行って置くべきであろうが都では田舎者と軽く見られていた関東武士が、やっと見つけた晴れ舞台で精一杯のパフォーマンスを示した思えば納得は出来る。ともかく、足利又太郎忠綱は一騎も損なわず、三百余騎の軍勢を向こう岸に渡したのである。

宮御最期（みやのごさいご）のこと

「足利」と言えば南北朝時代から室町時代に登場する源氏系・足利尊氏の系統を思い浮かべるが前章段で河童のように水中で活躍した足利又太郎忠綱は平将門事件で平家の祖・平貞盛と協力して将門を討った田原（藤原）秀郷の後胤と言う触れ込みである。先祖が共同作業で天慶の乱を解決したのであるから今回も平家に味方をするのは当然かも知れないが、時代の風は既に平家に吹き難くなっている。時流を察知するのは難しい。

宇治川の渡河で気を良くした足利忠綱は落ち葉色の垂れを付けた赤い鎧を身に付けて兜の前飾りには大きな鹿の角の飾りを付けていたと言うのだが、その様な不安定な格好で良く川を乗り切ったものである。その上に太刀は黄金造りで、背にした矢も鷲の羽を加工した高級品、連銭葦毛（れんせんあしげ）という立派な馬に、柏の木に金で縁取りをした木菟（みみずく）の彫刻がある鞍を置いて乗っていた。岸に着いたので鐙（あぶみ）に踏ん張って立ち上がりながら「遠くの者は声を聴き、近くに居れば目に見て下さい。我こそは其の昔、朝敵・平将門を滅ぼして顕彰された俵藤太秀郷から十代、足利太郎俊綱の子・又太郎忠綱・生年十七歳。この様に無位無官の身で高倉宮以仁王に弓を引き矢を放つこと天の恐れ少なくは有りませんが、弓も矢も神仏の御加護は平家にあるでしょうから、私もそれに肖（あやか）ります。三位入道に組する方々よ。我と思わん者は勝負をして下さい」と叫びつつ平等院の門内に攻め込んだ。

前章段で渡河に際して細部を注意する場面では百戦錬磨の武将を想像していたのに、それが十七歳の少年というのは、嘘にしても感心する設定であるが、専門の先生方の考証では此の章段で語られる話が実際の見聞録では無いらしい。合戦を遠くの方から（安全な場所から）眺めていた野次馬の誰かが「講釈師、見て来たような嘘をつき」という川柳に基づいて作った話が収録されたらしいので、怒らずに笑い飛ばして頂きたい。尤も北関東に根付いた藤原系足利氏に途中から清和源氏の系統が入って足利尊氏を生んだ源氏系足利氏が出来たらしいから、源氏も文句は言わないと思う。

本文に戻って「橋合戦」の最初に登場した平家の大将軍・左兵衛督知盛が「渡れ、渡れ！」と命令をしたので二万八千（実数は数百？）の平家軍は全員が宇治川を渡河することになった。その数に堰き止められて、早かった宇治川の流れも上流でダムのように淀んだ…と原本に書いてあるが、平家物語も冗談が上手になって来た。さらに流れる部分は早くなるから、平氏の兵士は急流に流された者も居れば、馬の後から渡ったので膝ぐらいが濡れた程度で助かった者もいた。そうした中で平家の地元である伊勢・伊賀の軍勢は、前章段で述べた「馬筏」を水流に破られて六百余騎が流されてしまった―と言うのだが、実数が数百だと全滅したことになる。

流された武士は萌黄（もえぎ＝薄い貴緑）、緋威（ひおどし＝紅花色）、赤縅（あかおどし＝茜の根を煎じた赤）などの鎧を着ていたから、それらが浮き沈みして流れてゆく様は「神なび山」と呼ばれた奈良・三室山山麓の龍田川に紅葉の葉が流れてゆくようではあったが、川の途中には用水を引く堰（せき）がある。木の葉が堰に入り込むように、途中の網代（漁業用の竹の網）に流された武者が三人居て緋威の鎧を着ていたから、それを見た伊豆守仲綱が「伊勢武者はみな緋威の鎧着て宇治の網代に掛かりぬる哉」と詠んだ。此の三人は伊勢国の住人で黒田後平四郎、日野十郎、乙部彌七と言う者であった。日野十郎が合戦の経験者であったから、弓の先端を利用して岩に這い上がり二人を助けて行った。

苦労をしながらも平家の軍勢は宇治川を越えたので平等院では激戦が展開された。その隙に高倉宮以仁王を奈良に逃がした源三位頼政は、残る手勢で防戦に努めたけれども、頼政自身が七十歳を越す年齢であった上に、激戦で左の膝に矢を受けて動けなくなった。重傷であるから此の場で静に自害をしようと平等院門内に退いて来た。

敵の大将に自殺されたのでは戦後の論功行賞に影響するから、平家の軍勢は是を阻止しようと迫ってくる。頼政の子・源大夫判官兼綱は、何とかして父親を遠くまで逃がそう（安心して自殺出来るようにしよう）と、白地に黒などの毛色が混じった馬に乗り攻めては引き返し、返しては攻め、縦横無尽に奮戦した。兼綱は紺色の錦で織った直垂に中国から輸入した高級な綾糸織の鎧を着けていた。平安時代には中国製品がブランドものであったらしい。其のうちに上総太郎判官（藤原忠清の子）の射た矢が兼綱の内兜（顔面）に当たった。

当然のことに兼綱は重傷であるから身体がふらつく。其処に忠清の近従である次郎丸という少年武士が馬を兼綱に並べて来た。少年と言っても知られた豪の者であるから、怪我をした獲物を狙う猛獣のように兼綱に喰いついてきて二人は馬から落ちて組討ちになった。元気な若者と顔に重傷を受けたオジサンとでは若者が勝つに決まっているが平家物語もウケねらいで、重傷を負った身で落馬した兼綱が勝ったと書いてある。

源大夫判官兼綱が、少年を倒して立ち上がろうとした時に平家方の武士十四、五騎が襲って来て馬から降り、重傷の兼綱を討った…と言うより押し潰したらしい。一方、伊豆守仲綱も重傷を負い宇治川の畔にあった平等院の殿舎で自害をした。その首を下河辺藤三郎清親（しもこうべとうざぶろうきよちか）という関東武士が、広縁の大床の下へ投げた、というのだが首は丁寧に扱うべきである。ただ、下河辺氏は小山氏系であり、一族が後に源頼朝に服従していて、常陸国内に領地を貰っている。此の場合も平家軍に取られないように首を隠したのだと言えないこともない。

源三位頼政に従った息子の六条蔵人仲家と其の子・蔵人太郎仲光も縦横無尽に戦い、多くの敵を倒して遂に討死をした。此の仲家というのは実は帯刀先生義賢の嫡子である。「先生」と言っても教職員では無く「たてはきせんじょう」と言う皇太子付き武官の長である。源氏は平家一族と違って親兄弟親戚同士の仲が悪い。源義賢が甥の源義平（頼朝の長兄）らと争って殺害された為に源三位頼政が遺児（仲家）を養子にしていたのであり仲家は育てて貰った恩に報いて壮烈な死を遂げた。後に出てくる木曾義仲は仲家の実弟になる。

若い者たちが次々に討死するのを見て源三位入道は、従属する渡邉党の中心人物である渡邉長七唱（わなべのちょうしちとなう）を呼び「私の首を討て！」と命じた。然し幾ら命令でも生きている主の首は斬れない。長七は涙を流して「とても斬れません。せめて自害して下されば其の後に首を頂きます」と頼んだので、入道も「尤もである」と言って西に向かい大声で「南無阿弥陀仏」を十回繰り返し「埋木（うもれぎ）の花咲く事も無かりしに身の為る果てぞ悲しかりける」と辞世の歌を最後に太刀の先端を腹に突き立て、うつぶせに貫かれて息絶えた。こういう場合に歌など詠んでいる余裕は無いのだが此の武将は若い時分から和歌の道に通じていたので最後にも落ち着いて遺言代わりの歌が残せたのであろう。長七唱は泣く泣く首を切り石に縛って重石としてから敵に気付かれないように宇治川まで運んで深い淵に沈めた。

一方、競の瀧口に名馬を騙し取られた上に屈辱を受けた平家側は、どの様にしても競を生け捕りにしようと探し回っていたが、競は其の事を察していたから、散々に暴れ回っていて重傷を負い、さっさと腹を斬って死んでしまったのである。

また宮方僧兵の円満院大輔源覚は、高倉宮以仁王が遠くまで逃げ延びられたと思う頃に、大太刀、大長刀を左右の手に持って敵の中を突進し、宇治川に飛び込んで重い鎧・兜などを失うこと無く水底を潜り抜けて対岸に着き、高い場所から平家方に向かって「どうだ、平家の方々よ。此処までは来られないであろう！」と大声にからかってから悠々と三井寺へ帰ってきた。

平家方にも気の回る人物が居て侍大将上総守忠清の弟・飛騨守景家は実戦の経験が多い武士であったから、合戦の混乱に紛れて高倉宮が奈良へ逃れたのではないかと、合戦の場を外れて自分が率いる五百余騎の軍勢を疾駆させて追跡を行った。

思ったとおりに高倉宮は三十騎ほどで落ち行く途中であった。奈良との県境になる京都府相楽郡にある三論宗（六二五年、高麗国の僧・恵灌が伝えた奈良仏教の宗派）寺院である光明山寺の前で追いつき、雨が降る如くに矢を射掛けたので宮方は集中砲火を浴びたような被害を受け、誰が射たかは分らない矢が高倉宮の左脇腹に突き刺さった。

落馬したところを敵兵が囲んで宮の首を取ったので、是を見た鬼佐渡、荒土佐、荒大夫、理智城坊の伊賀公、刑部俊秀、金光院の六天狗などという強そうな名前の僧が「今は是まで！」と、一斉に喚声を上げながら平家軍に突入して討死をした。

その中に、高倉宮の乳母の子である六条大夫宗信は「敵は多いし、逃げるには馬の馬力が無い。此の侭ではヤバイ！」と直感して、近くに在った井野という禁漁の池に飛び込み、浮き草を顔に載せて水中で震えていたところ敵兵は近くを通り過ぎていった。暫くして合戦が終り四、五百騎の平家軍が合戦の興奮で騒ぎながら凱旋をして行ったのだが、その中に白い狩衣姿で首が無い死人が戸板に載せられているのが見えた。良くみるとそれは高倉宮以仁王の遺体である。「私が死んだならば棺の中に入れよ」と言っておられた笛（小枝）も腰に差したままの姿である。傍に走り寄って遺体に取り付きたい思いもあったけれども、恐ろしくてそれも成らず、平家軍が完全に引き上げてから池を這い出して、濡れた着衣の水を絞り、それでも泣きながら京都へ帰っていった。この行動を知った人たちは誰もが六条宗信を憎んだと言う。

一方で、三井寺から救援要請を受けていた奈良の僧兵軍団は、その頃になってようやく意見がまとまり、完全武装をした七千人の僧が高倉宮を迎えに出陣してきた。何しろ大軍であるから先頭が奈良に通じる大和街道の木津まで進んだ時に後陣の部隊は未だ興福寺の総門辺りに停滞している有り様で、その頃に高倉宮が討たれたのである。

原文は「大衆みな力及ばず、涙をおさえて留まりぬ。いま五十町（約五キロ強）ばかり」とある。

二時間ほど早く救援していれば平家軍が敗れたと思う。救援が遅れて、後から坊主が泣いても何の意味も無い。その分、未だ平家方に運が有ったということであろう。此の章段の最後は「…討たれさせ給いけん宮の御運の程こそうたてけれ（気の毒なことであった）」で結んでいる。

（続く）

編集事務局　〒315-0001
石岡市石岡1397-2
TEL 0299-24-2063
（白井啓治方）
http://www.furusato-kaze.com/

ふるさと風の会＆ことば座 10 周年記念公演

ギター文化館発 常世の国の恋物語百 第 36 話

里山の風に恋歌の舞う

6月18日(土)・19日(日)ギター文化館(開場14:30　開演15:00)

●ふるさと風の会10周年記念公演　朗読詩劇・市川紀行作「未来に託す詩」　朗読・白井啓治

ふる里とは
物語の降る里

振り返れば　われらが七十年
それはいつも何かに
守られていた歳月
そうだ
掲げた理想が
傷つきながら
時に危うさを帯びながら
権力を縛り
立憲のこうべを凛と立て
そうだ
理想の旗ははためいていた
日本の奇跡　憲法九条の旗が
歴史に「もしも」はない
もしもはいつも悔いと
願望に偽ちている
それは「もしも」の選択が
権力の保身の意志に従うからだ

●ことば座10周年記念公演(常世の国の恋物語百・第36話)
白井啓治作「里山の風に恋歌の舞う」　手話舞・小林幸枝　朗読・白井啓治

風は幸せの言葉
風は温もりの揺りかご
風は光の景をつくる
さあ
風に包まれて蝶になろう
そして
風に包まれて
揺れる波に踊ろう

●札幌つむぎびと・友情出演
斉藤隆介作「花さき山」　朗読・熊谷敬子
パンフルート・横地竹笛太郎

やさしいことをすれば
花が咲く
いのちをかけてすれば
山がうまれる
うそではない
ほんとうのことだ

ふるさと風の会10周年記念展(10時～2時30分　入場無料)

ふるさとルネサンス講座の受講生2名と講師が中心となって、会報「ふるさと風」を発行し、この5月で満10年となりました。兄妹会のことば座の第29回定期公演にあわせて「ふるさと風の会歩典」を開催いたします。会員の書きためて来た小文を集めた文庫の展示・即売会をはじめ、風の会の分科会として、兼平智恵子が開いている「風の言葉絵教室」の作品を展示いたします。
また、伊東弓子が中心となって玉里御留川を歩く会の「御留川を紹介する資料」の展示なども行います。
皆様のお越しをお待ちいたしております。

※ことば座定期公演のチケットはギター文化館で取り扱っております。ギター文化館(0299-46-2457)
※ふるさと風の会展のお問い合わせは、打田昇三(0299-22-4400)兼平智恵子(0299-26-7178)まで。